

東京芸術劇場 社会共生セミナー

第1回「演劇公演の鑑賞サポートを考える」

2021年8月12日（木）14:00～16:30

オンライン開催



登壇者 パラブラ(株) (※五十音順)
蒔苗 みほ子 (広報)
松田 高加子 (音声ガイド制作者)
山上 庄子 (代表取締役社長)
ゲスト
関場 理生
山崎 有紀子

参加者数 約50名

情報保障 手話通訳、UDトーク

開会挨拶（東京芸術劇場）

社会共生セミナーは、共生社会実現に向けて劇場を含む文化施設で何ができるかを、皆さんと共に考える場、学べる場を作りたいと思い、今年度新たに立ち上げたもの。公演を障害のあるお客様にも楽しんでご鑑賞いただくための情報保障などの手立てとアクセスについての「アクセシビリティ」と、多様な人々が共に身体表現や音楽、演劇などの活動に参画してより豊かな芸術を模索していく「インクルージョン」の2つの側面について、回ごとに、テーマを設定していくシリーズとする計画である。

第1回は、鑑賞サポートをテーマに、パラブラ(株) (<https://palabra-i.co.jp/>) の皆さんと共に企画を考えた。

東京芸術劇場では2012年のリニューアル・オープンを機にバリアフリー化が進められた。視覚・聴覚に障害のあるお客様の情報保障の施策として、現在まで年間を通して鑑賞サポートを実施している。もっと効果的・効率的で利用者に便利な方法がないか。視覚・聴覚にとどまらず、障害の範囲を広げて対応していくにはどうすべきなのか。これらについて、同じ関心を寄せる方々や、同じような文化施設で働く皆さんと共に学ぶ機会としたい。

第一部 劇場における情報保障の実際

●聴覚障害のゲストと

山崎： 鑑賞サポートのない舞台には鑑賞サポートをつけてもらうよう要望して、舞台を鑑賞している。両耳に補聴器を装着しているが、台詞の内容や登場人物の感情は音からは伝わりにくい。演劇を観るときは字幕や、俳優の表情が見える席が必要。舞台手話通訳がいるとよりわかりやすい。

舞台の情報収集の方法は、聞こえる人と同じ。ただ、公演に鑑賞サポートがつくという事前情報はサポート利用者にはなかなか伝わりにくい。Twitter や情報サイトで探している。筆談対応、ヒアリンググループがあるといった鑑賞サポートの情報が公開されていると、劇場に問い合わせしやすくなる。

台本貸出しを依頼したときに、劇場の問合せ窓口では断られたが、主催者に直接連絡したら貸してくれたことがあった。スタッフ間でも鑑賞サポートに関する情報共有がされているとよい。貸出し台本を、当日ではなく、事前に送ってもらえると、ゆっくり読むことができる。鑑賞サポートに関する説明事項を記した書面を劇場窓口でも用意してもらえるとありがたい。説明が口頭だけだとわかりにくい。受付に要約筆記者や手話通訳者がいるとスムーズに対応ができる。

メガネ式の字幕機を貸し出してくれた公演で、常に芝居の進行と字幕が 10 秒ほどずれることがあって、残念だった。字幕の中身、クオリティにも課題がある。

山上： 補聴器のハウリングが起きることがあると聞くと、実際にはどうか。

山崎： 補聴器が耳から少し浮いていたり、音量が大きかったりするときなどにハウリングが起きることがある。本人は気づかないことも多いので、メモに書いて見せるなどして遠慮なく教えてほしい。

ヒアリンググループだけでなく、Bluetooth で聞くことができる補聴器も増えている。さまざまな方式で聴覚支援ができるようになってほしい。

●視覚障害のゲストと

関場： 音声ガイドの有無にかかわらず、自分の観たいものを観劇している。私は 2 歳で失明し、見えていた記憶がほとんどないが、幼い頃から観劇していて、見終わってから一緒に行った母や友達にわからないところを聞いたり、感想を話したりしていた。そうした経験から、音声ガイドがなくても気にならない。ダンスに見られるような抽象的な世界で終わるようなものはわかりにくい。

見終わってから劇場の方に舞台の形を尋ねることもある。また、一人で複数の役を演じる場合などは配役がわかりにくいので、こうした公演では音声ガイドがあると嬉しい。全盲でも、色について言葉によるイメージを持っている。こうした情報を伝えることが視覚障害者に失礼なのではと躊躇するより、伝えてもらったほうが手がかかる。

また、事前説明会という形で出演者の声で役柄を説明してもらったり、舞台セットを直接触れたりできると、上演中に舞台を具体的に想像できる。舞台説明のテキストデータを事前に送ってもらえると役に立つ。点字パンフレットは読むのに時間がかかるので、当日ではなく事前に手に入れたい。終演後にロビーで「こんなものが販売されています」とか「ポスターが掲示されています」など教えてもらえると、より楽しめたりする。

松田： 中途失明者には点字を読めない人も多い。スマホの音声読み上げ機能は利便性が高く SNS の情報などが取りやすい。

関場： 予約の段階で席までの案内を頼んで断られたが、会場では普通に案内してもらえたことがある。案内を頼んでも時間がかかったり、スムーズでないことも多い。

松田： 予約の際のチケット窓口の担当者が具体的にイメージできなかったのか、資格がない

と駄目と思ったのかも。誘導の経験がない人が案内したら失礼なのではないか、と思われる場合もある。

関場： 誘導は、肩か肘を掴ませていただいて、基本的には普通に歩いてもらえればよい。座席に座るときは手を取ってもらうか、いくつ目の座席なのか伝えてほしい。サポートのニーズは人によって異なるので、本人に希望を尋ねてほしい。また、移動にはエレベーターがよいと決めつけるのではなく、階段とエレベーターとどちらがよいか、選ばせてもらえる嬉しい。帰りは、自分が「きっかけ」をわかっているところまで案内してもらえると、スムーズ。階段で両手を取って誘導されてしまうと、白杖が使えないので逆に危険。しかし、本人からは言い出しにくい。多機能トイレに案内されることが多いが、広すぎて使いにくい。狭い個室のほうがボタンなどの配置がわかりやすい。

松田： 案内している側に悪気があるのではないのに、チグハグになってしまうことがある。こうしたことは、多少言い出しにくくても当事者からもはっきり伝えてほしい。

質疑応答

●公演情報の受発信

関場： 行きやすい劇場のメルマガを登録して、公演を探している。視覚障害者向けの情報で探すことはない。

松田： 晴眼・聴者と同じところに情報があることが大事。

関場： 基本的に紙媒体の情報は避けてしまう。QRコードがついているかもわかりづらい。インターネット上のテキストデータのほうがよい。SNS、特に Twitter や Instagram の音声読み上げ機能を使っている。写真の情報は入りにくい。

松田： 写真には説明のテキストを入れるなどの配慮が必要だろう。

山崎： 一般の公演については、Twitterなどで情報を得ている。バリアフリー公演情報はいろいろあるが、劇場のメルマガも一度そこに観に行ったことがある人には有効。慣れないうちは、手話講習会や、聴覚障害団体などで舞台のチラシをもらって観に行ったこともある。Twitterで舞台ファンとつながると、自分のほしい情報が手に入りやすい。

●鑑賞しやすい座席

関場： 舞台に近い前方の、なるべくスピーカーから遠い場所がよい。スピーカーの近くだと舞台の音が聞こえにくい。贅沢だが、一番前の真ん中が観賞しやすい。

松田： 弱視の場合、視野狭窄があり、後方から見たいとか、視野欠損で周辺視野がない、中心が見えないなど、さまざまな事情があることを補足する。

山崎： 前方だと口の形や表情などが見やすいので役者の感情がわかりやすくなる。また、手話通訳がつくとか、字幕がある場合は、通訳や字幕の前の座席だと、舞台も見え、音の情報も同時に得ることができる。事前に客席に座ってみて見やすい席を検証してほしい。

第二部 グループトーク「できること探し」

(無作為に3つのグループを設定し、劇場等における障害のある人へのサポートについて、身近で始められることや工夫できることについて話し合い、発表を行った。)

〈グループ1〉

各館でのサポートの内容を紹介し合ったのち、どのような人員体制でどんな部署が担当しているかを話し合った。設備やサービスについてホームページでわかりやすく発信するという、基本に立ち返ることの大切さを改めて実感した。

〈グループ2〉

バリアフリーに関する取り組みをどのように知ってもらい、劇場に来てもらうかが課題だと話し合った。メールマガジンなども有効だが、どこかにホームページを設けて、演劇や舞台の情報を一括して管理するシステムがあるとよいと思う。チケット予約の際、支払い方法が多様だが、不慣れな人もいるので、メールか電話、音声チャットなどで、チケット購入のサポートがあるとよい。

〈グループ3〉

やはり費用面の課題が大きいと思う。劇場間での鑑賞サポート情報の共有も重要。

●ゲストとのフォローアップ

山崎： 「うちの劇場には障害のある当事者から問い合わせがない」という発言があった。私の友人・知人にも、劇場に鑑賞サポートについて質問したり希望を伝えたりしないで黙って観に行くという人がいる。そもそも何かサポートの要望を伝えても対応しないだろうと思っている人もいる。ほかにも、家族と一緒に観るので、鑑賞サポートを受けることで席が離れてしまうのが嫌だという人も。問合せ先に電話番号しかないとか、ホームページの問合せフォームがわかりにくい場所にあって問合せができないといったケースもある。問合せがなくても、サポートニーズがあるのだということを知ってほしい。

2022年10月からテレビのCMに字幕がつくようになるというニュースがあった。ニュースの中で聴覚に不安を抱えている方は全国に約3400万人いると紹介されていた。字幕が普及していくことを願いたい。

関場： 視覚障害の人にも来てほしいと思われる方々がいることが本当に心強いと思う。情報が一つにまとめられたらよいと私も願っている。鑑賞サポートの事例を紹介しあったり、事前説明会のノウハウを共有できるようになるとよい。このような勉強会があることで、そういう繋がりが生まれるきっかけになればと思う。

第三部 情報コーナー（山上）

（※一部内容を抜粋）

障害者差別解消法改正で、3年以内に（2024年4月から）事業者にも合理的配慮を提供することが義務付けられた。

●作品の鑑賞サポート

視覚障害、聴覚障害のあるお客様への情報保障としては、字幕や音声ガイドなどがある。提供方法として、必要な方だけに提供するクローズド式のほかに、全員が同じ状況で鑑賞するオープン式がある。舞台手話通訳もその一つ。TA-netさんが舞台手話通訳養成講座などの活動をされている。

作品だけでなく鑑賞に付随するイベントなどにも、情報保障をしっかりと行ってほしい。今日も使っている音声認識アプリでの文字サポートや地域の要約筆記の派遣など。劇場のアナウンスも音声だけでなく、文字でも同じ情報を出してほしい。

バックステージツアーや舞台説明会などの方法で、事前に舞台の状況を知らせる公演も増えている。

●鑑賞前後のサポート



画面右上 バラブラ備 山上

チケット予約についてはメールだけ、電話だけでなく、なるべく多様な方法でサポートしてほしい。視覚障害のある方はスクリーンリーダーを使って情報を取っている。画像データでは情報が伝わらないので、テキストも載せるとよい。文字によるアクセスマップも有効。画像だけで出しているところが多いが、ぜひ加えてほしい。

バリアフリー対応についてホームページ等に明記することも重要。多目的トイレやエレベーター、駐車場の有無についても記してほしい。強い光や大きい音を苦手とする方もいるので、この作品にはこういうシーンがあることを予め知らせられると親切。研修会を開く、ガイドラインを作成するなどして、スタッフの間で同じ情報を共有することが大切。



●まとめ

観客を知ること、想像することが重要。今日の話にもあったように、当事者の状況は様々でグラデーションがある。障害に合わせてこのサポートと決めつけるのではなく、一人一人の状況に合ったサポートを。鑑賞サポートに大事なものは、100%を目指すのではなく、できることから始めること。施設の予算や状況に応じて、まずはここから始めようというものをぜひ見つけてほしい。劇場が障害のあるお客様を増やしていけるよう、前向きな動きとして実施してほしい。

〈後記〉さまざまな施設・公演における鑑賞サポート情報が一覧できるサイトを期待する声を受け、バラブラは2022年にUDCastサイト (<https://udcast.net/works/>) をリニューアルした。